古詠類題和歌集

上

特別
イ4
3163
26(1)

貴
14
3163
26(1)

春の山よ雪残れかし
神の庭山も遠しと海こえのぼれり
利とこのひとこと春いとよろしあれ
をもれすこそものことも又なくそあるへきをもく
那らの字さ句も遠いや角と乳あり真字あれを仮字の別
男文字あれを女りなおととこ殊あまい女殊あり
うことおおよそ彼あれをこれあり此句拙なき花ありく
ここそのったりとも次る正面さ純粋の歌ぞく

うちわすれをいひほめたるなどのあるべきことなり
のちにおとろへ板ぶきとなりてめでたかりしかど
ゐたくなきものなり

榛原安満

一もゝくさといふことありてさまざまのことをそへ
もみぢをふきこみたるなどいかゞあるべきことなり
一そでつゝみなどの
一採集と歌集とものふたつにてあるべきことなり
ものゝこゝろをとりてその井ぬる後採集よ小町男のかやうにつゞ
くよみたる人々也これのみにてよろしきなるべし
ぬれ〳〵ぬるゝなどを歌集よりあるべきことなり
ものゝひて同じ一ものゝ名あるいと書さ侍ることあるべからず
とあるべきことなり
一蓮の花古くよりめでたきものに名あるよしあるとも

るまゝらハ古今よあらぬかさ也とついてハ四季恋雑としてかくぶ
歌との歌ハまのくもてすいと集ふよよく四季をたちのそ也ハ拾遺を
歌此部よ物へすのかたるなどよくいのかの歌く越きくくと河也と
秋の歌よ河くぬり律んて此あやしきハそれ雑の所よくそう
一 恵比大いとあそう歌よ四季をわのそかすい屏風の歌とそれ
季号すくハらすへきてたとへハ正月ハ若菜つむ所とあるよふ河く
つるあり

古今集 後撰集 拾遺集 後拾遺集 金葉集
詞花集 千載集 新古今集 新勅撰集 続後撰集
続古今集 続拾遺集 新後撰集 玉葉集 続千載集
続後拾遺集 風雅集 新千載集 新拾遺集 新後拾遺集
新続古今集 新葉集 夫木抄 雲葉集 人丸集
躬恒集 素性集 猿丸集 家持集 業平集
兼輔集 敦忠集 公忠集 斎宮集 敏行集
宗于集 清正集 興風集 是則集 小大君集
能宣集 兼盛集 貫之集 伊勢集 赤人集
遍照集 順集 元輔集 朝忠集 高光集
友則集 小町集 忠岑集 頼基集 重之集

信明集　元輔集　仲文集　忠見集　中務集
大伴四行集　匡衡集　後京極殿集　後拾遺集　後成恩寺関白集
宮内卿集　四条大納言集　和泉式部集　清輔朝臣集　清輔集
公任集　法輔集　実方集　完頼集　元輔集　頼政集
恵慶法師集　安法法師集　道命阿闍梨集　加茂保憲女集　発心集
玄々集　二条皇太后宮大弐集　頭弁集　俊頼髄脳　俊頼朝臣集
今撰和歌集　柳風和歌集　源宰相中将集　源重之集　源三位頼政集
中務卿宮集　経信卿集　海人手古良集　古侍従集　小侍従集
藤原長能集　後朱雀院集　赤染衛門集　和泉式部集　和泉式部続集
金葉集　後葉和歌集　宗祇集　西行法師家集　山家集
住吉物語　四条宮下野集　讃岐典侍日記　中務内侍日記　建礼門院右京大夫集
紫式部日記　枕草紙

古詞類題和歌集上

春部

古今集　ふるとしにことしはるたつ心地こそいくかへりとも思ひわかれね　元方
　　ふるとしのことしの春のはつかりをいかでわれにて今日とまつらむ　友則
　　春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく　貫之
　　春霞たつやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ　素性
　　春霞たつたの山のさくら花ちりぬる風のなごりだにせよ　業平
　　春霞たつたの山のもみぢ葉を心にかけてしのふころかな　貫之
　　春霞たつたの山の桜花散らばわが身もともにこそ散れ　友則
　　春霞たつたの山の桜花見つつ越えなむ人まつとせず　素性
　　春霞たつたの山の桜花見てのみ越えむ惜しき心は　素性
　　春霞たつたの山の桜花見ぬ人からや風のつらくは　貫之
　　春霞たつたの山の桜花見ぬ人のためや風のつらくは　友則
新千載　春霞たつたの山の桜花見ぬ人のためや風のつらくは　後京極
　　春霞たつたの山の桜花見ぬ人のためや風のつらくは　赤染衛
詞花　春霞たつたの山の桜花見ぬ人のためや風のつらくは　後朱雀

後撰
みるみるそのかはる人のまちまれ
くれ侍らくきしける
同
みるに男のもとよりかへりふ小松引
まかんするのり出るといつりわれは
うつり
氣のうへの家
同
かるるときさとるくさ
同
このめはる
同
わつのあさこのめ
同
いしの火よとくる氷
同
まちえたもある雪
集
海のかたより雪の跡りて侍りて
集
山よりとをしめてよむのとみ
夫木集
伊勢のこうへの瀧よて流るるの
このとみを
うつり
あふの露みなかたのみ

春のくれをたもやなる男はまつまくむかしをそつめ　躬恒
父のとや姉つて小松を引にゆかれ行のこみまつまんまの事を　忠岑
のちのの雪すみおひも花をは神すかはら年々につまんとは
としのは春の草木のおとろくれかの山をと人やさそはる事
柳は緑の下に出人は神つとみるくて柳のちよもしるゝ
うるを浅み野への木のめも出さきをいつとよつむなかさん
春わのきさある沼への木のめはいるゝ火をやまかも
春とくる春のかほひのをたえやかへの草木の梅いつらん
山のは杉白雪のふるやひく流にうれて霞みてそ見ゆる　雅有
春霞わくれの山まはそよのおとをむかなる風し　為任
波こゆるふさこの雪のみ入るはくとも宇多のるの花みあかなか　西行
鶯の羽風をよむこのそての山霞の衣たちきすそあつとも

集
霞よ月のくもれるをみて
集
女とも梅の花みつてたのむれつも
集
梅の本に来て月をこよ侍りて
夫木集
清涼殿のいま重梅をと
集
梅の花を結つかく人のちか
つのそしける
集
梅の花はなく人にやまるく
玉葉
家に梅さくの山あれるは濃
のゝまとく
古今
その為よ梅の咲たるをとみて
集
梅咲たる頃ひをとりるさく
集
人の心ひたるやまをく
拾遺
家の栽よる梅をとゆくて人のまち
同
あれのもとすまなく流る入る
あそく咲くるは

さるあるてあかるあかもみゆるふ霞の出るたるたその月　西行
来の花みる衣なりまし誰かあめの春くれぬくたるやわれつむらも　躬恒
（かすみ稲夫木）（と夫木）（袖の）（里夫木）
月のもる梅の下枝よえふれんのかきもみひとも衣をまつへつ　雅有
くれたるよりよふさかのの重梅は九重ありのとへかむる　上総
出かてのよりひねもうて梅のふをもさうてもぬるすみ神やを　後頼
父あるてれはこのみなん梅のふるときもとゆるるへるる　友則
みるおよわちかちるなん梅のふ香つんかくおもひおこしく　紫式部
春ごとに春の名の門をひらみくをられぬかるよ袖やぬれ見へ　伊勢
ゆかしきよ梅の花のよ立かてそらたた梅をとまかゆるを　源俊法師
春としの花あるへの心よはのるあるその名よな残るとも　桐如
宿ちて梅てゐゐのひもあくたちもいかよのみやはよなかれ　為輔
ふるさとは人のつも年ありん梅のふ香よすまさされていのちらん　貫之

おのよ梅のそらよその流のなを
古今 月夜さへ梅のえだをおもふとへの
しへ人をしのぶとてよめる
後拾遺 春ごとにおもひいでこし梅よりかの花ものがう 公任
こととよみ侍りける
集 梅の花をおりてをこせ人のもとにつかはしける
新勅撰 春ごとにおもひいでこし梅よりかの花ものがう 公任
新拾遺 おもかげにうつりし人のにほひさへ梅の花をやそでにしむらん 小弁
集 ふるさとの梅のもとにて
梅の花をおりてをこせ人のもとにつかはしける 紀友則
集 梅の花をおりてをこせ人のもとにつかはしける 紀友則
うつり 梅いつもおもひしものをうつりかの 元輔
日 梅とうよ梅

集 梅のおもてたるをおりて
新勅撰 春のそらおもひたえにし梅の花 紀友則
風雅 面影ばかりにほひ残れり
古今 やよいのつごもりの日
さかりなるをよめる
詞花 うつりにし花のあだなる色ゆゑに
続古今 春のうつろふものとこそ見れ
古今 梅の花のまがきにあるをよめる
大木集 山田のさとにまかりてはじめて梅を
き〳〵〳〵 海人手古良集 春のそらおもひたえにし梅の花 紀友則
五葉 おもかげにうつりし人のにほひさへ梅の花をやそでにしむらん 紀友則
き〳〵〳〵 集 梅の花をおりてをこせ人のもとにつかはしける 紀友則

同　春の暁花ちるころ誉のるなれ
同　行くる春よ誉のおもひいまよ時ハ
くつ　もゝのうくひと
同　うくひすをむかふ
集　のゝおやふみたてそうて誉の
　　時をまふ
うくひ　誉柳の枝よありくひ春を
集　千よひよつゝもよ誉のゝとを
きゝく
集　三月つこもの日つゝしる誉の
あきく　の
うくひ　むすこる柳
　　海辺のよしの行ゝる人のかのつく
ある柳をおもひく
夫木集　春柳のものやうをを

集　梅くまうひてこゝろ春よそらの
　　ものゝもとゝをみく
集　わこひをんのもゝ
　　ゝうひすのうくひ
集　うのゝのうつゝをうめつゝを
新葉　七月つこもの日つゝしる誉の
　　時よ
うくひ　むすこる柳
集　よの百首奉りて
　　そのをくれ桃のそのめて花ゝる
集　桃の花ちるくんのうちもひて
あるをみく
集　梅のものゝもをありといひて
集　あくまりりるあよ花ありてやる
集　あゝよ梅のまうもてゝるくに
　　花の時ゝりる八

集　梅のうつろひてこゝろ春よそらの
　　ものゝもとゝをみく
集　わこひをんのもゝ
　　ゝうひすのうくひ
集　うのゝのうつゝをうめつゝを
新葉　七月つこもの日つゝしる誉の
　　時よ
うくひ　むすこる柳
集　よの百首奉りて
　　そのをくれ桃のそのめて花ゝる
集　桃の花ちるくんのうちもひて
あるをみく
集　梅のものゝもをありといひて
集　あくまりりるあよ花ありてやる
集　あゝよ梅のまうもてゝるくに
　　花の時ゝりる八

くらべ
花桜のにほひおもふ花をしひて
同
あかずもをしき春よ
同
春ごとにさきぬる花
同
折てかへらむ花
集
花を見てちるをいのる
拾遺
花とをりてあれのよかさして
てよ
後撰
思ふ人の家にまかりけるに
花おそくさくる
同
桜と人のおくり侍りて
集
桜のものへまかりける[illegible]の花ぬる
ことを思ひて
集
花の枝にふみのあるとて
集
桜折ておこせたる人に
集
[illegible]さきの桜のちるを見て

あかずとて[illegible]花桜風[illegible]
露やれ桜[illegible]花の[illegible]
ふるさとの桜[illegible]同し花[illegible]
さくら姫[illegible]
花みむと[illegible]　大弐
このさと[illegible]　貫之
[illegible]　伊勢
[illegible]　同
ことしより[illegible]桜[illegible]　友則
春の[illegible]花の[illegible]　仲文
[illegible]桜[illegible]　忠見
[illegible]桜の花[illegible]　和泉式部

同
人の家に桜も咲なんといへば
同
夕ぐれに来て花桜をみやりて
古今
桜の花の散侍りけるをよみける
なる人の身まかりにける[illegible]
拾遺
あれはてゝ人もすまざりける家
に桜の咲みだれて侍りけるを見て
後撰
松のもとに侍る人の花を
やるとて
同
おなじ花桜を折て友だちの
許へつかはすとて
同
家の前に竹の中に桜の咲けるを
みて
同
わかれ侍る人の家に花を
つかはすとて
同
月の面白かりける夜花を見て

[illegible]桜[illegible]　同
[illegible]桜[illegible]　同
のこりなく[illegible]桜花[illegible]　よみ人しらず
あさぢはら主なき宿の桜花心やすくや風にちるらむ　恵慶法師
[illegible]花は松の[illegible]　元輔
桜花[illegible]　よみ人しらず
桜花[illegible]　是則
[illegible]花の[illegible]　兼盛
あたら夜の月と花とを同じくはあはれしれらん人にみせばや　信明

同 女をみんくみくよみて
同 山櫻をれて折り侍る
集 花みよあかき
後撰 やちひさきものの本の梅をみ
てをりける
集 まもあつまのことさるよるの
咲るをみく
兼 ちひの事よかくて花のさ
くる
集 梅をうゑて
集 紀人よ山の櫻をうつぬ
後撰遺 人こそ花よまでうゑけるとかく
もつて侍るべきにや
同 花をみてのうたくさのみと
やおもふとよみ侍る

同 梅を植てぬ折り侍る
々と八よめる
集 人のもとより梅の枝をたよれ
てをこせたるもしる
同 ちひさき梅をうゑみしと
して花さきたるもしる
集 うつくしみつくる君と
山花
八重さきて梅のえをて
こよれてこのてまてよめる
夫木集 うゑ梅といまをくのみてきて
りくらん八
新古 いを梅をおりてくのつまし
て侍りければ
同 花みに侍るくよさそれく
よみける

新勅
月あり花ありて人を
続古今
花みよとのみ人々
續拾遺
思よ知てふ人のまつ
梅の花折つゝ
新後撰
ふる郷の人のもとに花つ
かはすとて
風雅
花ゆゑ後るゝ人のうらめしく
ちぎりおきけむ
同
花の一枝露ながらと人のこゝ
ろをりてといひ遣はしける
集
家あるじとゝもに花をみよくてすぎ
きくれば
同
花ゆゑに
先ぬる梅のうらめしくて
同
花のおもかげ
花ゆゑに
ふりぬる梅をみて

新千載
庭の梅のさかりに後朝の
恋
くるとゆふべ
續後拾遺
みのかよひ花のあつまるとみて
よみ侍ける
集
夜もすがら花を風のさそふ
同
花ゆゑにみれば人目にをかれ
てなほあかぬ
後拾遺
花の色は
うつりにけりな
集
ちらぬ花
後撰
花のうへにおく白露も
日記
風ふけば花ぞ枕にちりてける
くるあさ毎に
古今
梅の花
たれ
ふく風
ながら
人の
いひ
つげ
なく
に
ま
た
ま
だ
き
に
ち
る
ら
む
花
ゆ
ゑ
に
な
ど
か
は
人
の
こ
ゝ
ろ
を
ば
う
ら
み
ざ
る
べ
き
同
花
ゆ
ゑ
に
人
の
こ
ゝ
ろ
の
う
つ
ろ
ひ
ぬ
る
か
な
お
ほ
つ
か
な
し
ら
ず
や
ま
ぢ
の
雪
の
し
た
草
ま
だ
き
に
ち
る
ら
む
花
ゆ
ゑ
に
な
ど
か
は
人
の
こ
ゝ
ろ
を
ば
う
ら
み
ざ
る
べ
き
同
花
ゆ
ゑ
に
人
の
こ
ゝ
ろ
の
う
つ
ろ
ひ
ぬ
る
か
な
お
ほ
つ
か
な
し
ら
ず
や
ま
ぢ
の
雪
の
し
た
草
お
ほ
つ
か
な
し
ら
ず
や
ま
ぢ
の
雪
の
し
た
草
花
ゆ
ゑ
に
人
の
こ
ゝ
ろ
の
う
つ
ろ
ひ
ぬ
る
か
な
お
ほ
つ
か
な
し
ら
ず
や
ま
ぢ
の
雪
の
し
た
草
花
ゆ
ゑ
に
人
の
こ
ゝ
ろ
の
う
つ
ろ
ひ
ぬ
る
か
な
お
ほ
つ
か
な
し
ら
ず
や
ま
ぢ
の
雪
の
し
た
草

集　さそふ水のみなもとまでちる花の
　　あとをしたふ春かぜ
集　やまのゝ桜の花のあるうへに
今撰　白雪のごとく落花をみる
門出　花の比とゝまるべくもあらなくに
　　ちりぬれかゝをしらぬ人の
集　数のこる花ぐさ葉のあるを
　　もみぢ
焦　花のちりぬるのみならてのち
　　あめとくる
集　花のちりたるとおもひて
集　桜散くちをみおくるとを
　　くのもゝ鳥
集　三月世ゝよ花のちるを
康　有つゝもものゝおもひてのく

ある校　ようてくうり
古今　流るゝつゝもの〻よをこゝ
　　ろさしふかゝの流るゝとよめる
集　春ごとにたえぬながれのかけ
　　の花のゆくゝ
集　山ゝあやゝしく咲る花あり
古今　よのつゝのはなやよ春の咲ふ
　　もとよめる
未来集　山ふかのいみてを枝とわく
　　うぐひすさへ鳴るを
拾遺　井のしらなみふかの花なり
　　ろく咲るをみて
集　山ふかみ風のたよりをみて
續千載　山ふとわけて人のおらせ給
集　山ふとわけて人の待よをうて

花ちるをみるものゝなみだかも春雨ふる　源重之
春たてるしるしにやいとゞ雪ふりて　源順
雪ふかくふるとも花のいろはまさらん　紀友則
よのつねの色にはあらぬ桜花　素性
春のゝにあさるきゝすのこゑをたに　素性
あふことをえてやみなまし　素性
山ゝのさとのさくらみよまたれつゝ　素性
あふことをえてやみなまし　素性
なのつゝあをねはみよ浦みなる春のしら波の　文胡

夏歌

集 なつのつゐ
たゝ
う月ばかりなる桜とみそめる
後の哉
み月の比迄桜をくのもとよ
はきのそうてとて
陸奥の
手枕
集 さくらの
さゝれたる枝ようて
集 う月てる山々のおのくれるを
ほとゝぎす
み月ちかうなり月代なり
うちくるよ人よきゝくる
集 人のあるくおもてある小菜畑よりは
ろ〳〵なく
ろ〳〵なくのうち
集 ふるさとよりて
ゆうてゝ

文治六年女御入内屏風歌
あけぬとてとをとをあるさよやうやうとものさよおかれてひゝきくん 俊成

ほとゝぎす
まつ
心のうれ人ふたゝひくとて
まつるとく秋ふるころぬれ
ものうき風やおのくれ
ほとゝぎす
名をやもるみぬ
いつとをのわさたをす
ものうき頃ひとてうち月哉 法印
ものうきうれなの
ほとゝぎす
名をや

同
物おもひけるの後をみく
旅をも
山つとのみるよ夢のうはくも
後たに
ふるかくれよるの雪をときく
よみ侍る
恒房
うの花の垣ほある家
集 あやひをやるて
集 こゑのうちて郭公をきて
集 物をひくをもよ郭公のこゑを
集 百いかよりよもすからを
集 人の郭公きゝ侍りしよみ侍る
集 よふて郭公の一聲侍りよ
集 よやう侍りよ郭公をきて
集 あるくのよのひて物いふよう
郭公のあを八
集 郭公の聲をよくよる
集 よみ侍る
恒房
郭公なくをきて侍りし
集 よふて郭公のあをきて
集 郭公のかよのやとくのいゑよ
金葉 郭公聞くるなきてこゑた
らのありて侍るくるを待ふる
郭公を
かりよこゑもかりなるゆふ
の暮々を八
同
郭公鳴くる小きこつやとからるく
よ
新後撰 小さとをて郭公をきて
集 女房
郭公こゑをきゝてたりける
よ郭公をきて
集 夕月のくもりたりける
新古 郭公なく夕月夜にて月あくる
集 夕風なるかきゝ侍りて

を夢にて郭公
ぬてしも郭
こゑもきかく
郭公聞やの
郭公みと山
くのみそよ
出てまもなつ
さ月やとこ
月てとて
さみたれの
夜山のこゑ

集 五月五日あやめをとりて人に
あやめ草人にねたゆと思ひしは我身のうきにおふるなりけり 小町

集 五月五日ちいさきくす玉を人のもとへやるとて
ふるさとにみぎはのあやめかりそめに君がためにと引つるかな 紫式部

同 五月五日ほとゝぎすのなくをきゝて人に
けふはいかにあやめの草の根をそへて声のうきぬる郭公かな 同

集 よどのにてあやめひく
あやめひくみぎはの浪やたちぬらしこゝろしてひけ人のしらねば 康資王母

集 あつまにてあやめをひく
袖ぬれてかつはあやめぞいつもひく我こそあやめのしるしなれ 実方

集 さみだれのみまよあやめふくを
たれかまたあやめの軒にひくらん五月の雨をまつやけふなる 勝範

集 五月ついたちのころしのびたる人に
かりにとはやしむくらのみる程にしのぶの花のちりぬべきかな 赤染衛門

夫木集 むかしのこと
むかしのことおもひいでてむかしをしのぶ軒のあやめとおもひをつて よみ人しらず

同 いちみのことも
しのぶみのことのみまみゆる軒のつまにたちばなとかはりなむ 同

集 なくなりたる人のこゝろやとて五月
なくなりしひとのこゝろをあやめ草さはの蛍ともえぞなりなん 小大君

集 扇のをりさくを見て
いつしかもさかぬあやめのゆかしきにいつとなくとはたれかみるらん 伊勢

同 たちばなのさきたるを人のもとへやるとて
橘のにほふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香ぞする 同

集 六月五日橘の花をそへて
橘のにほひもふかきもとの香に花たちばなのみをはなれめや 紫式部

古今集 あるじの家に橘のさきたるを見て
橘のにほひしものをいつまでかあやめの空をみつゝなかめん 元良親王

集 をみなへし
まちかねてくらきうちよりかれがれにたまたまあふはあやなかりけり 道助

集 夕かほのさきたるを見て
うたかたに思ひし人もわすれゆく宿のわかれをしのぶころかな 紫式部

うつり 夕かほのしげりて宿をかれ/\に
ゆふかげにこれなつかしきわがやどの秋の花とや人のみるらん 雅経

海人 ほのかなる夕かほの花をみて
みをつくし思ひそめにし夕かほのゆくへもしらぬ人ぞこひしき 新清少納言

新撰 あだ人の門のほとりに夕顔を
うちつけに夕がほの花をたれかしる人のこゝろの露もこぼれて 忠見

集 せきにて夕かほを見て
たそかれのほのかにみえし夕かほの花をとめてや人のきぬらん 勝範

集 くものかゝれるを見て
いつくとも知らぬなるべし夕かほのかげをたのみて身をよせつらん 忠見

新撰 夕月夜をこのましきにみる雉
その夕の月のひかりさしいるゝひとすぢに雉の声 小式部内侍

の咲くことをみく
拾遺集 ふくかぜのそをくさ人のもとまでて
集 ふくかぜをうらみつるかなもみぢ葉を
後拾遺 おくりやはせむ秋のふかきに
後拾遺 ふくかぜのうらみてもなほ山里は
くさ人のおとのみぞうれしき
後拾遺 秋ふかみ山のかけはのうすくこき
の色ごとにおくしもぞ見る
後拾遺 あかつきのしもよりおくる山里は
て秋ぞかなしき
集 時しもあれ秋こそ人のわかれなる
古今 物ごとにものこそかなしけれ
秋とだにおもはでくらす
後拾遺 秋ごとにおくしもなれや
家の秋をくさ人のこひしかるらむ

為頼
秋の夜の月をみむとてきたれる
集 明ぬとてかへるみちにやおきわすれ
集 暁ごとの露にぞありける
集 さをしかの花のにしきをおりかけて
同 くさ人のたのむる秋のしるしとて
集 いつしかもくさ人のもとに秋ふかみ
集 花ちらす風よあらしと吹ぬとも
集 秋の夜の露をたまにぬく
拾遺 秋のくれ野もとかれぬ
集 秋のくるをまつにはあらぬ
集 虫の声々あはれとぞきく
古今集 ものやおもふ
のそのやまぢこえぬ
集 あてこの葉もふりはてぬとて
拾遺 さこそ世人さだめなるらめ

為頼
秋の夜の月をみむとてきたれる
集 明ぬとてかへるみちにやおきわすれ
集 暁ごとの露にぞありける
集 さをしかの花のにしきをおりかけて
同 くさ人のたのむる秋のしるしとて
集 いつしかもくさ人のもとに秋ふかみ
集 花ちらす風よあらしと吹ぬとも
集 秋の夜の露をたまにぬく
拾遺 秋のくれ野もとかれぬ
集 秋のくるをまつにはあらぬ
集 虫の声々あはれとぞきく
古今集 ものやおもふ
のそのやまぢこえぬ
集 あてこの葉もふりはてぬとて
拾遺 さこそ世人さだめなるらめ

為頼
秋の夜の月をみむとてきたれる
集 明ぬとてかへるみちにやおきわすれ
集 暁ごとの露にぞありける
集 さをしかの花のにしきをおりかけて
同 くさ人のたのむる秋のしるしとて
集 いつしかもくさ人のもとに秋ふかみ
集 花ちらす風よあらしと吹ぬとも
集 秋の夜の露をたまにぬく
拾遺 秋のくれ野もとかれぬ
集 秋のくるをまつにはあらぬ
集 虫の声々あはれとぞきく
古今集 ものやおもふ
のそのやまぢこえぬ
集 あてこの葉もふりはてぬとて
拾遺 さこそ世人さだめなるらめ

新古
七月の比神のまよおさく
志ゝた
古今集
くものいよ〳〵秋のそらを
集
山へ秋風をゝく
集
七月山をよ春ついてよ神
へのそおのあをくる
うつゞ
ゑゝたちのうち
集
山さとをゝくゝゝの辞を
おゝく
拾遺
山もとよてのかくる時えゝく
しの
夫木集
やのつ風よつゝくゝゝの
ちをゝく
集
うゝ
同
ふてうちの月を

集
山さとをゝく秋の月を
集
月夜よのうれをゝ眺
給ふを
集
秋のよ月いかゝあの
集
秋ふ月いさゝかもかゝ
拾遺
ゝよ月のやもて作りを
元永
堀の自宅さやの
あちこちむゝて
集
月夜よゝれいよ〳〵
同
月夜よゝれの
集
あ山たるやゝて月みる
集
山さみのひるか月のさ入
ゝる
拾遺
い月さこの月をかゝれるを
よる

山さとよあ山たる方をゝていくの人秋の月歌 小町
ぬさもむのやよみゝて本のゝ元月のかゝゝる 雅
久のゝ秋月かゝみ秋れてゝさる 友峯
寺のもゝ山ゝめもれ月のゝる風ゝみて 友則
秋の月波のゝゝ 紀貫
ゝ山ゝゝゝゝ水のもよちゝみぬ元秋の月 如房
ゝゝかのわひさゝるよあ山たゝ月をあゝれゝみゝかゝる 友人
初山ゝ山ゝ月ゝのゝゝ八月かゝれ 友則
みゝくのゝゝ月ゝのゝゝゝ 源俊
山さみ山ゝゝゝ月ゝのゝゝ 元輔
ゝゝ月のあゝもあのゝ月ゝゝゝ 元輔
ゝゝ世ゝよゝゝあゝゝ秋のよ月 公任

集 くろつるむのそこもあらはに
古今 くものゝよるのわびしきころ
もゝのかずをきゝてのめる
歌仙 いのれゆくゆくのちかきよ
ゐなと
なをゆくかものゝ秋をかなて
新撰古 おもふこゝろもかぎりあるよに
集 秋のまよ松虫のねをきゝて
集 娚くものいとをさゝくめる
をみく
集 秋の月をみる人のあるかぎり
集 田もとのゝ田のかゐる水も
のゐるこゝろとゝく
集 うのはなのあくるとゝく
集 あるてをりくるんさて
をゝく
拾遺 人の居るかぎりをもやをや
夫木集 おもとのゝよそのゝみちさへ
集 松のしたみちかくると
夫木集 いのつゐたのいとをるくる海
ものゝみちをみく
集 かゝるのゆふのくてゝみち
くると
集 海のみとうたゝあり
古今 神の社のあさりをてのみる
すゝゐのえのもゝのみちとゝて
新古 秋をて
拾遺 月をそのみ居の秋の夜ふくる
よみ侍りくる
同 あくてをりくるんさて居のゐ
をゝく
拾遺 人の居るかぎりをもやをや
夫木集 おもとのゝよそのゝみちさへ
集 松のしたみちかくると
夫木集 いのつゐたのいとをるくる海
ものゝみちをみく
集 かゝるのゆふのくてゝみち
くると
集 海のみとうたゝあり
古今 神の社のあさりをてのみる
すゝゐのえのもゝのみちとゝて
新古 秋をて
拾遺 秋のをとをたれのこんくるの
古今 くものゝよるのわびしきころ
もゝのかずをきゝてのめる
歌仙 いのれゆくゆくのちかきよ
ゐなと
なをゆくかものゝ秋をかなて
新撰古 おもふこゝろもかぎりあるよに
集 秋のまよ松虫のねをきゝて
集 娚くものいとをさゝくめる
をみく
集 秋の月をみる人のあるかぎり
集 田もとのゝ田のかゐる水も
のゐるこゝろとゝく
集 うのはなのあくるとゝく
集 あるてをりくるんさて
をゝく
拾遺 人の居るかぎりをもやをや
夫木集 おもとのゝよそのゝみちさへ
集 松のしたみちかくると
夫木集 いのつゐたのいとをるくる海
ものゝみちをみく
集 かゝるのゆふのくてゝみち
くると
集 海のみとうたゝあり
古今 神の社のあさりをてのみる
すゝゐのえのもゝのみちとゝて
新古 秋をて
拾遺 秋のをとをたれのこんくるの
萩のはやしやうつろひぬらん 恵慶
その秋歌のくゐ
かくのはやしもみぢぬ
病事ひとりのこ
のつゐたるさとの
ゝもふかきの
きくのもゝとうたゝあり 中務
いつのまもみちゝ

集 くよ家をあるじて
古今 人のおきよ家よおちの秋を
くるる
同 よの中はうきものとこそ
をみよ家の花とこそ
同 人のおもひよ家の花よ
拾遺 かの家のこと
集 白家のてうんのもちよさた
くもれるをみて
集 月夜よ家の花とくれて
集 ものこそよ夜の家として
集 よものくれつとたく
集 とくらぬつ旨をあれ
集 明くよこそ

あるこあくる
うきうら秋ちんとをみさん花こそちめ拾遺くれめや 業平
秋の家よう
よの中はうきものとこそ
をみよ家の花とこそ
人のおもひよ家の花よ
拾遺 かの家のこと旨をくこそつらひよれ 同
拾遺 かの家のこと旨をくこそつらひよれ 同
集 白家のてうんのもちよさた くもれるをみて
集 月夜よ家の花とくれて
集 ものこそよ夜の家として
集 よものくれつとたく
集 とくらぬつ旨をあれ
集 明くよこそ

ぬるてほとは
秋のよう
ねざめて
九月の
いるつよあの
人のおもひよ家の花よ

同 い秋ありよ
未集 田よるくむらひの
をみく
集 秋の家よもあるて
集 九月つよる日のう
古今 秋のよう人をこそ
うらいやりてよめる

同 この
うらなまふ
あるよ
めよそて
ゆよ

集 十月てるよめる
後撰 十月つごもりの夜とよめる
新古 十月かくれの雪の朽をるとて
おもひ
七つのくらゐもみちとえ侍り
集 風ふくまのをよのちもしを
玉葉 山さとの
よさふけぬれのいもゝ〳〵をハ
集 時雨のいやそふるまやうへる
集 月夜のつれ
後拾 おもやうく時雨をたゝく
夫木集 うつのやとこんくる時雨を
集 まきに白たつをめてゝ

秋はいぬ風よ木葉をちらすなよ
夕日のもとにこゝろなき身のみ
さそれの色ふかき
この後校よひむかしの
夢さめよもみぢをみくる音を
をもひあはせのきばのたけ
こゑ
さそめあけ
せくれぬ
あくよせみそ
うちうらみ

大納言
法皇
御製
通船
赤染
小兵
紫式
左京
入道
右京
光俊
紫式

続古今
篠のはにおきゐる霜のたえまなき
ゆくとみゆく
集
冬の夜の花のさかりにかゝると
同
いしの中なる菊の花の色に
にほふと
集
十月のおきての菊にほふ梅ひ
にほふとみゆ
公任集
水たまるみよ月のうつるると
集
細谷のおくにさくと思ひて
集
湖のくにたての山の花にほふ白
くみゆると
集
女のそでのうへにほくあく
きえかけるれは
集
雪のかくれんかたまに
集
山のはに雪とはのうへてゆけるときそ

しのゝめにおきてみる霜のうへは夜のあけはなるゝか　匡衡
きくみえし菊のちりしよりとなかなかしらぬ人　公任
見るよりおなじ花たつはるかぜのいろはまよひぬ　同
たましひの露八のし紅葉月もしおりもの影なく見え　小大君
山の井のかげにうつむ月のかげをみてみるに照りき　こきみの女房
めづらしき人をとふ紅葉の色をみよしのかげの影にて　小大弐
あさくいるその白山の雪にはてゆきをとのかげみず　忠岑
たえまなきさはつまとあひにあかくのよのけはひあく　無名
さくらさく雪ふる雪はかたしくゝよハおもひかけり　和泉
あしびきの山のはにおける白雪もかへるのこちなし　行尊

集
よのなかのつねのみ見ゆる
いは雪のふるよ
集
雪のふるやのかきくもの（）ひさ
ま（）にに八
蜻蛉
仏名のあしたに雪の降りければ
古今
雪ふれば木ごとに花ぞさきにける
拾遺
雪をと（）のうへにつもらく
待つ人の花ぞ待たれける
拾遺
雪のあしたを思ひて
康資母集
しらゆきの雪の降りたると
集
みやまの雪の降りかかるを
拾遺
松の枝に雪のふりをみて
続古今
人代のまつのきとて
雪のあしたの山のこころ

世の中にあらまほしきはのつれもなき　貫之
うちしめるたよりのふる雪は人めもかれぬ　和泉式部
年のうちにみなしらまくのふる雪はつもりてはかはる　躬恒
冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける　躬恒
やまつみの雪ものうへにきえもせぬはなのいろ　兼平親王
ふりつめて雪はぬるともの心はかはらぬ　躬恒
連哥
ふみわけて見るのかげやいのちのつきるまでも雪　下句 子の下地
神無月もみぢはふれる雪のうへにたるやのいろ　兼乳母
おく山の松に雪ふる雪よりもいまよりはなきことの　紫式部
さのみきて庭の松かげのをしへにてまつる雪のちるかも　入道前太政大臣

みえ〻ぬ八
集　ものゝ
ものゝ
金葉　いのちだに
いのちだになりこの
よさえ
集　いのちだに
いのちだに
玄〻集　いのくとそこ女人
物語　ゆのそれこ
くる〻人
陽炎　男の
〻ぬ八
集　人の
集　さゝ
つゆあの
同　あやさ

人〻のこゝろ
あり〻る女の
集　まこあくあるゆ
集　てあるそ
ひもくの
集　いもせ
拾遺　久〻くいひわ
あくのみ
集　鶏あ
拾遺　人〻て
集　いもせ
拾遺　久〻くいひわ
あくのみ
集　鶏あ
拾遺　人〻て
風雅　はなに
はなにあの
金葉　つゆあの

上二十五

わもあるをと女のいふ
集 やくしの花くよある男をと
む女のそくく
集 うらみておいそと人のしひて
集 女の海とんくよハあくまもくるを
拾遺 わすれ草
拾遺 いひしそくる女のとハふいわ
されをいいふ侍るとハ
拾遺 わすれ草にてよくる女をしいひを
拾遺 ふしくるくる人のむくの海
うのく
拾遺 人よわすられく侍るとき
拾遺 あの人よふ色侍てわすら
拾遺 れてよくとハ
拾遺 人よわすられくよのと

みの海よ屋羽うちもまてくるのやーあそまくる人を法き 拾遺
あそくやとハのたのくもあん物あるくよ 伊勢
いのしふくらみさまんわうみのこみ花いよおくよある男を 万葉
わやみやーる
拾遺 いひしそくる女のとハふいわ 出典
されをいいふ侍るとハ
拾遺 わすれ草にてよくる女をしいひを
拾遺 ふしくるくる人のむくの海 よみ人しらず
うのく
拾遺 人よわすられく侍るとき 同
拾遺 あの人よふ色侍てわすら 同
拾遺 れてよくとハ
拾遺 人よわすられくよのと

もーくる
金葉 まてとねる人のおもひいてお
こされるよりある 同
千載 むつまじくあくてまれな
くる人よもーくる
後拾遺 まちくるまでのあけをと
ういいくる人のまてるよ
後拾遺 のくこひ侍よくる男みやこ
出てよくる女にのそめく 同
後拾遺 男よやくこまくる人の女
あるねよ海をさーてをく 同
集 女のあくよやくれくるまで
いひおくをくるよ
千載 おくる侍るをとくる女よを
集 やくまでありとみくへよ

めくーやとるよむやとまてろいくせをるそこひうへん 後宇多
せるまあて後のいのを後やこくへやーー 同
世のせいいのやくほの方をなるまとハかのやうに 同

集 つくれとわするとそ人よ
玉葉 よまあんのうちやとよわて
ゐて身ひとりとや人よ
新後拾遺 人のこころにくる女の許なる
あのくいとおこを修正八
集 わとれやとぬまある矢うち
のくすつる
拾遺 人よわとれくねるとれ
やまとうり修正八
集 るふるよ人のきてみよ
集 人よあてとれくよあうくる人
よのふる 四
四のうてうるあさのあよ
なとくひくるよ
拾遺 男のおよるふる。このことやか

てよひくれとこ。うくれ八
集 雲のいとうてうるよくへのすまるふる雨 雲武三
人のこまるの拾遺 ぬるまて
拾遺 法てきよあるよくる女のあよ
てるのあて空のふり修りくれ八
集 このとふ袖のあるさるとふくよ
拾遺 月むあくてくるよ人を給修て
集 男のあよきこぬ水のあて
うの孔とひくるよ
集 水一かるあよ女のあよ
拾遺 や人とあさ人をひふくる
る男よ。のそもく
集 やんとあ人のあひ法よ
集 志のひくる女の色のまれ給
りくるよくてつのそひ

小町 いつのあるやくるとふ
みよのまるよ
秋八野とふ
ことあうくやみ
よりの川おの
そのよ秋のこ
つきをひ急よ液とあの八の孔こ
うつよふきもくあふ人めつむとみるのひ
もまくく人めてくしひ
中の一

新古今
人志也こひしくもあるかな
よもすがらかよふ千鳥の
千載
思ひくる夜半の袖の月
よもすがらかよふ千鳥の
拾遺
思ひ侘ぬる人のもとより
つれづれとながめ
拾遺
思ひ侘ぬる人の
いにしへのしづのをだまき
拾遺
きのふこそ
拾遺
思ひしかども
かくれも
拾遺
思ひしる女いかでかこのよ
かくる世をも中たのもしや
拾遺
きのふこそ
拾遺
思ひ侘ぬる女の
集
きのふこそ人もなかりしとともて
集
思ひわたる人とみつゝ
集
あるかなきかある女をこのひてお
もふらく
集
思ひてあよ女のみたれ
ともてく
いにしへのしづのをだまき
やとよく人まちえつゝ
新古
思ひてこらしいる女の
新勅撰
んあらむ
てのそいる

いにしへのしづのをだまき
拾遺
きのふこそ
拾遺
思ひ侘ぬる女いかでかこのよ
かくる世をも中たのもしや
拾遺
きのふこそ
拾遺
思ひ侘ぬる女の
集
きのふこそ人もなかりしとともて
集
思ひわたる人とみつゝ
集
あるかなきかある女をこのひてお
もふらく
集
思ひてあよ女のみたれ
ともてく
いにしへのしづのをだまき
やとよく人まちえつゝ
新古
思ひてこらしいる女の
新勅撰
んあらむ
てのそいる

集 久しくまかりかよはで女のもとにつかはしける

集 久しくとはぬ人のもとにつかはしけるに

しらぬもとに

拾遺 人をあひしらでつかはしける

そてもつのえさらなりけるにいひ侍りける

拾遺 男のとはれざりけるに

拾遺 あさゆみ(?)にける男に

後拾遺 人のつらさを思ひてかくなん

たえてかよひ侍らさりける人に

後拾遺 門(?)におきてあやしくいひける女に

人のおもふ心をしりける

門さしてありける家にて

新拾遺 男のもとへつかはしける

あひて人のはじめしける

拾遺 女のもとにかよひける男

こむといひしむかしの花もちりにけりなにをたのみにすぎにしものか　元真

あふことはいつとしもなくまたれけりわすれぬものとたのむばかりに　忠岑

しらぬ人のたのめしことのはなれどもうみのくちなるなみぞかゝれる　よみ人しらず

おとにのみききしもゆくの月ならぬ山のはにのみかくれゆくかな　同

たのめこし浦の藻のよるべもなくてなみのみぞよる　同

恋するに人はあはでもそのとしとものわすれこそ　大伴家持

わすれじとたのめしやはあらん秋のよはてて生きのこるなる　和泉式部

秋の夜はあふことのかたいつはりはあるぬしもぞかへる　兼輔

たらちねの山のかかれるくもと思へばかなしき　大弐三位

あふて後の恋のうちにもあらはこそよそにも人を恋ひつつ　伊勢

物おもひけるのち

後撰 久しうなり侍りける女のもとへ

わするともおもはぬ人も侍りける

後撰 久しうなりにける女のさらに

このこともなくてやみにけれは

集 あひみるまでとせぬくる

人をはじめよりつれなくてのちに

とせぬまに

集 このごろは女のおとせざりければ

集 わがもとにいひおこせける男に

集 男の人のもとにあるをよめる

拾遺 このごろうらみて男のこたへ

久しく成にけれは

後撰 のちにあひてかくなるなりけるを

海のほとりに

今ぞしるくるしきものと人またむさとをばかれずとふべかりけり　よみ人しらず

恋ひしさはおなじ心にあらずとも君がかはらぬもとのいもとなむ　忠岑

なかなかにわすれずものをおもふこそそとのみつゝしのびしらしし　和泉式部

うちとけておもひしそらに夏の山のかひたになにのよるべなき　敦忠

なよ竹のよなかきうへにはつしものおきゐてものをおもふころかな　忠房

いにしへのそらにおぼえぬ物思ひのそでのなみだはかれやすらん　和泉式部

飛鳥川ふちにもあらぬ我がやどもせにかはりゆく人もけしきあり　伊勢

あふことのたえてしなくはなかなかに人をも身をもうらみざらまし　よみ人しらず

うつせみはからをみるにもなぐさめて深草の山けぶりだにたて　兼文

いつる女の恋すみきしける
拾 女のおもかけしのひしとえし
らぬを人も[illegible]たるは
拾 いひのほりたる女のおもかけ
さらぬはいさゝかあめもふるは[illegible]
集 ある女の[illegible]
集 [illegible]
[illegible]あらぬかやとりし男に
拾 [illegible]やくるまの人なり
[illegible]とりひたるは
拾 女の[illegible]めなさんあり
[illegible]中[illegible]たるは
拾 女の[illegible]かあるよ[illegible]
との[illegible]侍りたるは
拾 [illegible]ひとと

[illegible]波のおもかけのくに　[illegible]
[illegible]やみせたる　[illegible]
[illegible]人もかし　[illegible]
[illegible]いのつひにはなすてかみめ　[illegible]
伊勢の海にきて[illegible]縄のあらんは[illegible]　[illegible]
[illegible]いつのあれ風[illegible]ちめる　[illegible]
あるへ[illegible]男にはさ[illegible]ぬ　[illegible]
[illegible]人もとろちきかな　[illegible]

拾 女の[illegible]ひ
[illegible]侍るに
新拾遺 女よこ[illegible]ひさかれいく
[illegible]たるは
集 女よ[illegible]ひさ
[illegible]たるは
拾 男の[illegible]
[illegible]人やいのみまんとく
拾 [illegible]へとくめみな
んつむとりひ侍りたれは
後拾遺 おもひくめのつま[illegible]
集 [illegible]八十[illegible]
りつるあるれ
集 女の[illegible]ひのかよあをいひ[illegible]

[illegible]の[illegible]ぬ[illegible]　[illegible]
[illegible]のつるのまへ[illegible]　[illegible]
[illegible]のつ[illegible]　[illegible]
[illegible]むのつたのこ[illegible]　[illegible]
あまのあまてのみかる[illegible]くめよの[illegible]　同
[illegible]風[illegible]のつ[illegible]　[illegible]
[illegible]のかれのそして[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]

集 女とふひやみ将ていひゝ侍ゞ人
拾遺
物いひける男の淵ハ瀬になど
いひける返しによめる
拾遺
女の淵ハ身をうきよとていひ侍ける返し
え人の、いふるつかの女をうらいひつる
てよみける
拾遺
身よりあまれる人をうらいひつる
よみける
集
十九よりわするさ女とふひのて
集
みやつのちとる女をさうたとて
拾遺
逢見て後いふ人をふ侍りて
後撰
人のみのひの戒へおくるのつなを
いひく
集
女風まかつらくとれく
玄々集
人のかれよみてるをいひおく

えさつまよいひも来まてをよれまじハ人よくのうぬ物とちぬ　同

淵やさは瀬にはなりける飛鳥川浅きを深くなす世なりせば　赤染衛門

身をすてて深き淵にも入ぬべしそこの心のしられますれ　後撰

この世にてきみをみるめのかたからば来ぬ世をまたでなにたのまん　貫之

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまどひまされる恋もするかな　友則

あふことはかたいとつみのむかしにて人の心のしられける　友則

月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとやみん　元方

秋の夜の月の光はきよけれど人の心のくまはてらさず　貫之

まつ人をまつにつけてもうき人の心をしらぬわれぞわびしき　業平

うれしきもうきも心のひとつにて人にしられぬ身をいかにせん　和泉式部

せたりける

集
うき人をこひハみよりけひく
拾遺
さだめたる男もなくて物おもひ
侍りける頃
集
中ことかあつすいの八と女の
いひ侍りし返
集
あのあつる人よ
集
あるとかたのむ人の心まの
へゆくよ
集
むらとまよそむ女よ
集
涙のまかの数まさんとたのめ
たる女のもとよ
集
わすれたるをぬ女よ
新拾遺
黒ハいつくもとへいハをことまなく
あまのやうよ恋人あまといへよ
よみける

いのちだにあらば秋風のよこにまつ浦つよのわきまもと　伊勢

あまのすむうらこぐ舟のかぢをなみ世をうみわたる我ぞかなしき　小町

ひとりのみ
人の身のやくへ見えぬおもひしとの夜半もあふ身のあはれなるハ　元輔

すつよりひのかなしのあさまにも物を思ふ人やなからむ身よ　重之

おくれいやまとをみてハ淡をのうやさハ数かさん　和泉式部

日ハてるよ我よ我のことのぬハつよかおもをいのちありて　重之

まき人ハの物おもめとなくてしらず涙のまさるや数つれなん　清正

さきのよのいつちた人をなほさらそんものまさてくらやむ　元輔

かたつみのそことまちてかあまる物にそれの物なればハ思ふ　為信

集　山さとのあるじ女もさそはるる
　　女の藏　女の海さへもいつるらし
　　よりいして後こそ人も
集　さそはれて
　　男よつれくるものなるらし
集　うつくしきものとおもひて後こそ
　　あふぬ人も
集　水ぐしの色にて物いそんとた
　　めらる女よそのよ
　　逢ふくいひわたる後る女よ
集　むの一ふあり一人のあひにの
　　まいひこるよ
　　矢のそのみそ
　　人よをへる
　　腹の載
　　月つくまよりもと女のいひもと
　　せやのれハ
　　ふるく物いひ後る人よ
集　うつくしのとこのむをふくそ
　　女のぬよあつなのそよつそ
　　くる
集　みちあれ苗のりよをさしてく
　　のりくやる
　　ものをて
　　ふいもをみのれのりをしる
　　後ほ
　　女のりよあてことをれく
　　をしもちくる
　　新後を
　　ほ此なのみくる女のりくを
　　みなくよつくく

わのこやくもりてんほさとあるよ
山よりも海をんとをふみハあんくをもつて色筆　たのよ
名よりてよをもみのくの神なり　ふきくのうたん　萬葉
人をとひおりみんそをくをのうたハ　伊勢
うらくよりもひやらるうくをを見れハ　伊勢
死さのねりのうらうちのとりのまとうん　源氏
今くもひわるぶ後のくほまるくよ　ちくる
月なやくれる尼物のとりをたくさぬものハ人あり　伊勢
みるのまくれさ女なまとくるまの人ことを　よみ人しらず

人よをへる
腹の載
月つくまよりもと女のいひもと
せやのれハ　　萬葉
ふるく物いひ後る人よ　　伊勢
うくしのとこのむをふくそ　　敦忠
女のぬよあつなのそよつそ
くる
みちあれ苗のりよをさしてく
のりくやる　　源氏
新後を　　清正
ほ此なのみくる女のりくを
みなくよつくく　　よみ人しらず

集
いつくとうてくるくよさまよ
りわる女多ねよまて
集
久しくまぬくよ秋くようて
枕詞
わすれぐさくる男のみもとわて
おくりて後れも
枕詞
つれもなくまぬくよまちみち
くる秋のようてきーくる
枕詞
ふとてくるくよくの
のみ後々と枕詞
ねてをて
あさのみもちかるようくく女
のそよきーく。
集
くのよくこそ是ほみて
やくく
枕詞
あしの秋らしくくるくの秋の
枕詞
みもちかるくとて

敦忠

こゑをうれのくものと女をるくの
おつとぬくの
秋やあいのまる萩の花のくよめく
そいなくくよかもし秋くるくの
くよくの
とてくよくの
おくりて後れも

岡

枕詞
つれもなくまぬくよまちみち
くる秋のようてきーくる
枕詞
ふとてくるくよくの
のみ後々と枕詞
ねてをて
あさのみもちかるようくく女
のそよきーく。
集
くのよくこそ是ほみて
やくく
枕詞
あしの秋らしくくるくの秋の
枕詞
みもちかるくとて

花園

枕詞
ある男の秋とねたしてもくう
々見ハ
枕詞
女の秋の言をうつみくおくて
後々見ハ
集
あるもくあるくよ秋のようくく
枕詞
物いしくある女よ秋のもあそとう
みて来ともよく
枕詞
人の水とつみてみよくもいし
て後々見ハ
枕詞
いしくくくる女よそのるかく
のよしをくくくくて
枕詞
物いしくく女の流とかりて後
枕詞
女のもよくまるあるよ
ことをさー出て後々見ハ
枕詞
女のもよくまるをもてれよ

あよんよ法ひくめ
あれくのみもやとんくよ秋のしもの
みて、さハ言をもくよくくとうる
をるのくくるすハの仲多まくくとうる
あよさの言をも海さみさくあるものくも
そのあものとて

よみ人しらず

よみ人しらず

馬内侍

弁保

よみ人しらず

恒徳

仲平